

マタイによる福音書 21 章 43 節における ἐθνός の指示内容について

澤村 雅史

1. 問題の所在

マタイ 21:43 は「マタイの神学、マタイ福音書とユダヤ教との関係およびその社会的背景」を読み解くうえで重要な句⁽¹⁾であると考えられる者たちの間では、この句の中の ἐθνός の指示内容について繰り返し議論に上ってきた。

G.N.Stanton は、この ἐθνός を「新しい民」と解し、21:43 はマタイ共同体とユダヤ教の関係の理解にとって最も重要な句であると論じた⁽²⁾。

一方で、A.Saldarini はそのような指摘が時代錯誤的であるとし、マタイの論争はユダヤ教内部のもの (intra muros) であって、21:43 はユダヤ教の指導者からマタイのグループへのリーダーシップの交代を指摘しているのだと論じている⁽³⁾。

これに対し、W.G.Olmstead は、Stanton を擁護すべく、「新しい民」という解釈について、前後のペリコーペを含む文脈や、ἐθνός のマタイおよび LXX における用法に根拠を求めて論じている。この「新しい民」は、アブラハムの血統によらず、義の実践によって、神がアブラハムに与えた「大いなる民」という約束を受け継ぐ、というのである。

また、須藤伊知郎は、この ἐθνός が無冠詞かつ単数形であることから、特定の「民」あるいは「異邦人」といった集団を指すことはできないとし、「その実を結ぶ」という分詞構文によって限定される一般用法であることを論証している⁽⁴⁾。

本稿では Olmstead 説および須藤説を批判的かつ拡張的に取り入れつつ、マタイ 21:43 における ἐθνός の指示内容について、さらなる考察を試みたい。

(1) Wesley G. Olmstead, "A Gospel for a New Nation: Once More, the ἐθνός of Matthew 21.43", in: Daniel M. Gurtner et al.(ed.), *Jesus, Matthew's Gospel and Early Christianity*, Edinburgh: T&T Clark, 2011, p.115.

(2) Graham N. Stanton, *A Gospel for a New People: Studies in Matthew*, Edinburgh: T&T Clark, 1992, p.118.

(3) Anthony J. Saldarini, *Matthew's Christian-Jewish Community*, Chicago: University of Chicago, 1994.

(4) 須藤伊知郎「民族性と救い—マタイ 21,43 の釈義—」、『西南学院大学神学論集』56 巻 1 号、1～33 頁。

2. 「新しい民」か？

1) Stanton 説

Stanton は、21 : 43 の背景にマタイと同時代のユダヤ教とキリスト教の対立と分化を想定している⁽⁵⁾。そして「マタイはその時代にあつて、キリスト者たちをユダヤ教徒たちからは際立った実体と見ていた」⁽⁶⁾ のであり、「新しい民」は、マタイ自身の用語ではないにせよ、その意図するところを要約する用語であると主張する⁽⁷⁾。Stanton は、この「新しい民」はユダヤ人と異邦人とからなると論ずる一方で、この「新しい民」がユダヤ的伝統とは非連続であると主張している⁽⁸⁾。

2) Saldarini 説

Saldarini は、マタイは新しいキリスト教共同体へと、ユダヤ人共同体から方向転換したのではなく、福音書内における論争も、ユダヤ教全体というよりは、個々の教えや、指導者たち、また時には彼らに従う民衆を相手取ったものであると主張する。「王国は『あなたたち』から取り上げられ、その実を結ぶ ethnos (21 : 43) に与えられる、という主張はユダヤ教内の論争であり、ユダヤ教に反対し、キリスト教を肯定するといったものではない」というのである⁽⁹⁾。Saldarini はさらに、マタイは 21 : 43 において、自らの集団を王国の実を結ぶ ἐθνος とみているのはほぼ確かであるが、当該箇所における ἐθνος は自発的な組織や小集団のことを指す用語法に基づいており、イスラエル全体を置換する「民」(nation) という意味ではないと主張している⁽¹⁰⁾。王国はイスラエルの旧いリーダー集団から取り上げられ、同じくイスラエルの、しかし新しいリーダー集団であるマタイのグループに委ねられるというのである⁽¹¹⁾。

Saldarini は自説の根拠として、1) 21 ~ 23 章におけるイエスの論争相手はユダヤ教の指導者たちであること、2) 21 : 45 はこの喩えがユダヤ教の指導者たちのことであると述べていること、3) 「ぶどう園」とはイザヤ書 5 : 7 によれば「イスラエルの家」であり、すなわち小作人たちとは民全体のことではないと考えられること、4) 関連するイザヤ書 3 : 13 ~ 15 でもヤハウェの裁きが降るのは民の長老たちに対してであること、5) ἐθνος はマタイの当時、非常に広い意味で用いられており、国や民というだけではなく、商業組合や社会階級や政治的小グループを指すのにも用いられて

(5) Stanton, p. 118.

(6) *ibid.*

(7) *ibid.*

(8) *ibid.*, p. 11.

(9) Saldarini, p. 44.

(10) *ibid.*, p. 60.

(11) *ibid.*, p. 201.

いたこと、を挙げている⁽¹²⁾。

3) Olmstead 説

しかし Olmstead は Saldarini に反対し、この喩えはやはり単にリーダーシップの交代ではなく、民 (nation) の転機を指示しているのだという。

Olmstead によれば、イザヤ書 3 章はたしかに長老を民から区分して非難しているが、それは民が免罪されたことを意味せず、5 章そしてイザヤ書全体からは、民もまた裁きの対象であることが明らかである。

また、いわゆる「宮清め」(マタイ 21:12~14) のあとにイエスと論敵との間で繰り広げられる激しい論争において言及される三つの喩えは、どれも、一方でさばきを、他方で神の国への参与をというように、「神の民の驚くべき再編について語る」⁽¹³⁾ のである。徴税人や娼婦が御国ではイスラエルの祭司長や長老にとって代わる(マタイ 21:31b~32) のは、彼らは父の意志を行うからである(マタイ 21:31a, cf. 7:21~23)。王国は従来の小作人から取り上げられ、イスラエルの神に正しく彼のものである実りを携え帰る者たちに与えられる(マタイ 21:41, 43, cf. 3:8~10, 7:15~20, 12:33~37, 13:18~23, 21:18~22)。王子の婚宴の招待客リストはまったく書き換えられる。最初に招かれた者たちは滅んでいるからである(マタイ 22:7~10)、しかし交代した客もまた王の検査を受ける(マタイ 22:11~14)。このように「神の民のメンバーシップは民族的特権ではなく、イスラエルの神への忠誠によってしるしづけられる」⁽¹⁴⁾ のである。

Olmstead は 28:19 すなわち福音書の結末において「マタイの物語は際立って新しい方向性を示すのである。(中略) この新しい命令において、ヤハウエのいにしへの目的は果たされる。古い契約に従って、地上のすべての民 (*πάντα τὰ ἔθνη*) がアブラハムとその子孫に連なった祝福に入るのである。(中略) その伏線ははられている。洗礼者ヨハネの宣告(マタイ 3 章)ではアブラハムの約束は血筋によってではなく、悔い改めにふさわしい実によって受け継がれることが述べられる」⁽¹⁵⁾ としている。

Olmstead はまた、「8 章の百人隊長(異邦人)の僕の癒しの記事では、彼の信仰が確認された後に、天国の宴席には『東や西から大勢の人が来て』座につくこと、その一方で『御国の子らは、外の暗闇に追い出される』ことが示される。下敷きとなったイザヤ 43:4~7 では、これらは『国々から』集められたイスラエルの子たちであるが、マタイの物語における重点は、国々の民がイスラエルにとって代わることではな

(12) *ibid.*, p. 58-63.

(13) Olmstead, p. 123.

(14) *ibid.*, p. 124.

(15) *ibid.*, p. 121.

く、信仰ある異邦人が終末の宴席に神の民ともなる座を見出すというところにある。イエスにとっては、ヨハネにとってと同様、終末における神の民に連なるのは、アブラハムの子孫だということによるのではなく、アブラハムの神への信仰なのである⁽¹⁶⁾ と主張する。このように Olmstead は、単に Stanton 説を擁護するのではなく、イスラエルからの連続性という点において修正を加えている。

さらに Olmstead は、LXX およびマタイにおける ἔθνος の用例を参照し、自説を根拠づける。

まず LXX では、イスラエルの定着物語において、ἔθνος は複数形で用いられ、敵対勢力としての諸民族を指し、また捕囚の際にイスラエルがその中へと投げ込まれる対象としての諸民族を指す。しかし、単数形ではしばしばイスラエル自身を指す。創世記 12：2 ではアブラハムが ἔθνος μέγα へと約束される。また出エジプトの際に神は怒りを発し、背いたイスラエルを滅ぼすが、モーセを ἔθνος μέγα とすることを約束するのである（出 32：10）。

つぎに、マタイにおいて ἔθνος は 12 回の複数形の用例では異邦人（45：15、20：19）または国民（マタイ 20：25）を意味し、とくにうち 4 回の特徴的な πάντα τὰ ἔθνη は、イスラエルをも含んで包括的にすべての民を意味する。しかし、単数形（いずれも定冠詞なし）の用法は、当該箇所を除けば 24：7 に「民は民に（ἔθνος ἐπὶ ἔθνος）... 敵対して」という繰り返しの用例があるのみであり⁽¹⁷⁾、LXX の用例に沿った意味しか見出し得ない（マタイに特有の語義や用語法が見出されるわけではない）という⁽¹⁸⁾。

結論として、マタイ 21：43 の ἔθνος が具体的に何を指すのか、ということについては、なお難題のままであり、そこには二重の判断が可能であると Olmstead は主張している。一つは、「新しい ἔθνος の存在は、古いものが退けられるということの意味する」という判断であり、もう一つは「イエスと、彼に従ってイスラエルの神に正しく実を携え帰る人々（マタイ 3：7～10）」が、アブラハムに約束された子孫として、神によって再興された民となることを表す⁽¹⁹⁾ という判断である。

Olmstead 説の、当該箇所の ἔθνος を再編された神の民＝血統によらず「ふさわしい実」（マタイ 3：8、21：43）によって保証されるアブラハムの子孫とする解釈には一定の説得力がある。しかし、マタイがなぜ三つもの喩えを組み合わせ、神の国の再編について強調して述べているのか、その背景についてはなお考察されるべき余地が

(16) *ibid.*, p. 122 ~ 123.

(17) ミカ 4：3、イザヤ 2：4 に関連。

(18) Olmstead, p. 131.

(19) *ibid.*

あるのではないだろうか。

また、これまで拙稿において論じてきたように⁽²⁰⁾、28：19 の宣言が「際立って新しい方向性」を示しているかどうかについては留保をつけたい（異邦人宣教への積極的な転換や、単純な肯定ではない）。

4) 須藤説

これに加え、Stanton や Olmstead の説においてさらに疑問であるのは、無冠詞単数形の *ἔθνος* がそのみで「新しい民」または「再興された民」といった積極的な意味を持ちうるのか、ということである。

この点について須藤はマタイ 21：43 にイスラエルからキリスト教会への救済史的交代を読み取る「定説」に対して異議を唱えつつ、「その実を結ぶならばどの民族にでも与えられるであろう」という解釈を提示している。

その論証として、条件としての分詞句を伴う無冠詞の名詞という用法がギリシャ古典（プラトン）、七十人訳、新約聖書（とくにパウロに並んでマタイ）に一般的に見出される用法であるという文法的・文体的裏付けを、用例に基づいて示している。

また、「実を結ぶなら誰にでも」という解釈がすでにオリゲネスにおいて見られることや、その解釈がトマス・アクィナスを経てルターにおいて「実を結ぶ異邦人」という解釈に至った過程を明らかにすることによって、解釈史的裏付けを示している。また、さらにはマタイ 21：28 から続く三つの喩えのうち、最後の婚宴の喩えにおける招きとの対応関係からこのことを裏付けている。

そして「実を結ぶ」ことへの要求すなわち「父の意志を行う」ことへの要求はマタイ福音書を通してなされる終末論的かつ普遍主義的要請であることを例証を挙げて明らかにしている。

これらを踏まえて、須藤はマタイ 21：43 がこの「マタイの普遍主義を支える重要な支柱の一つである」と論じている⁽²¹⁾。

しかしこの普遍主義は須藤の主張のように、「神の葡萄園は今や仕切りがなくなる」⁽²²⁾ ことを示すのみであろうか。むしろ応答的な義の実践という新しい仕切りが作られたことを意味するのではないだろうか。「実を結ぶことへのラディカルな要求によって過った自己保身思考を打ち砕き、そうしてすべての民族に平等な地平を切り開く」⁽²³⁾ ことは、同時に、義の実践を基準とした排除と包摂、すなわち神の国の再編を意味しないだろうか。

(20) 注 35 に詳述。

(21) 須藤、前掲書、33 頁。

(22) 須藤、前掲書、30 頁。

(23) 須藤、前掲書、33 頁。

3. 排除と包摂——再編された神の国へ

マタイ 21:43 の εἶνος とは何か。ここではその指示内容について考察を進めるために、テキスト分析を試みる。

前述の Olmstead の指摘のように、当該ペリコーペおよびそれを挟む前後のペリコーペは、神の民の再編というモチーフにおいて共通している。また、その再編は真の悔い改めにふさわしい実を結ぶことによって起こるという倫理的注釈において共通している⁽²⁴⁾。それゆえ、ここでのテキスト分析も、これらの一連の喩えを通じて行う。

1) マタイ 21:28～32

このペリコーペではヨハネが示した「義の道」を信じなかった祭司長たちや民の長老たちが神の国から退けられる一方で、信じた徴税人や娼婦たちが神の国へと受け入れられるという対比が、ある父親と二人の息子のやりとりに喩えられている。

喩えと 32 節の編集句は 31 節 c 「アーメン、私はあなたたちに言うておく。徴税人や娼婦たちはあなたたちよりも前に神の国に入る」という橋渡しの言葉⁽²⁵⁾によって、ぎこちなく繋がれている。その 32 節は 25 節を参照し、ペリコーペ全体を一つに括る、まとめの役割を果たしている。それゆえ、この喩えは、「祭司長たちや民の長老たち」に対する批判を先鋭化し、あるいは批判内容を明確化するために、マルコ 11:27～33 から持ち込まれた権威論争 (23～27 節) の拡張としてマタイ編集によって付加されたものと考えられる⁽²⁶⁾。

それでは、この喩えの付加によって明確化・先鋭化されている内容とは何であろうか。それはヨハネの洗礼への応答によって示される「信」による逆転、すなわち神の国に関する排除と包摂である。徴税人や娼婦はヨハネを信じたが、祭司長たちや民の長老たちは信じなかった。これにより徴税人や娼婦は神の国に入り、祭司長たちや民の長老たちは入ることができない⁽²⁷⁾のである。「信じる」とは、単に内心のことがらではなく、ヨハネが示した「義の道」(32 節) に応答すること、すなわち、「悔い改

(24) Olmstead, p. 124.

(25) この言葉についてルツは「イエスに遡り得るが、しかし彼の活動を回顧的に見てもいる」とし、その起源については「ほとんど何も言えない」としている (U. ルツ『マタイによる福音書 (18 - 25 章)』(EKK 新約聖書註解 1/3)、小河陽訳、教文館、2004 年、253 頁)。

(26) ルツは 23～32 節をひとつのまとまりとみなし、前半 (23～27 節) の論争的会話は「喩えの物語叙述上の提示部を作り上げている」(前掲書、250 頁)と指摘し、しかし「内容上、28～31 節 b と 32 節の間に緊張がある」と指摘している。さらには、「マタイ自身が、伝承されたイエスの言葉 31 節 c を元来の喩えを締め括っていたイエスの結びの言葉の代わりに置いたのであり、そしてその後自分自身が書いた 32 節で続けたのである。」(253 頁)と指摘している。

(27) 田川建三『新約聖書 訳と注 第 1 巻』、作品社、2008 年、772-773 頁。ルツ (2004:257) は「言語上相対的な優先を意味し、絶対的な優先ではない」と判断しているが、その解釈自体は文脈に合わないことを認めてもいる。

めにふさわしい実」を結ぶこと（マタイ 3：8）なのである。

さらに、喩えの中で「父の意志を行った」最初の息子は、口頭での返事ではなく実際に行動を起こしたことをもって評価されている。すなわち同様に「義の道」を「信じる」とは心に信じるだけのことではなく、応答的实践を含むのである。

2) マタイ 21：33～44

このペリコーペは 33 節「別の喩えを聞け」によって、直前のペリコーペに結び付けられている。マタイはマルコ 12：1～12 に、以下の変更を加えている。

- ・「季節に」(τῶ καιρῶ ※ルカでは定冠詞もない) → 「実りの季節が近づいた」(ἤγγισεν ὁ καιρὸς τῶν καρπῶν) 終末論的ニュアンスを加えたものか。
- ・各回に派遣される僕が複数である。初回に派遣された僕さえも殺される。第二回に派遣されるのは「前よりも多く」の僕だが、そのかわり第三回目の僕の派遣が省略される。迫害の残虐性・悪辣性を強調か。
- ・息子が殺されるのは「ぶどう園の外」
- ・反逆者たちの末路について、イエスは論敵に答えさせる。その答えの中で反逆した小作農たちは「悪人ども」(κακοὺς) と呼ばれ、「ひどい」(κακῶς) 殺し方をされると断定される。
- ・また、「悪人ども」から取り上げられたぶどう園は「その時(季節)ごとに彼(農園主)に実を納める(οἵτινες ἀποδώσουσιν αὐτῷ τοὺς καρποὺς ἐν τοῖς καιροῖς αὐτῶν)」農夫たち(41節)に与えられる。
- ・43節の付加。
- ・(ルカとともに) 44節の付加。
- ・次の記事につなげるため、論敵が立ち去るという記述を省略。

これらの変更点のうち、付加された 44 節(ルカ 20：18 並行)は、41 節前半と 42 節(マルコ 12：10～11)の解釈句として機能している。さらに 43 節はルカにもないが、同じく 41 節後半の解釈句として機能している⁽²⁸⁾。すなわち、43 節の付加によってマタイは、前ペリコーペに続いて、排除と包摂のモチーフを、当該ペリコーペにおいても際立たせようとしている。

当該ペリコーペにおいては、その前半において、預言者に対する迫害の歴史が回顧されている。そのような迫害は 5：12 において言及されているが(「あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである」)、それは義を理由とした(ἔνεκεν δικαιοσύνης)迫害であり、「私(イエス)」を理由とした(ἔνεκεν ἐμοῦ)迫害である。

(28) ルツ、前掲書、272 頁。

ここでも義は実践を前提とされている。悪人たちから取り上げられたぶどう園を貸し与えられるのは「その時（季節）ごとに彼（農園主）に実を納める（οἴτινες ἀποδώσουσιν αὐτῷ τοὺς καρπούς ἐν τοῖς καιροῖς αὐτῶν）」農夫たち（41 節）であり、神の国が与えられるのは「その実を結ぶ（ποιοῦντι τοὺς καρπούς αὐτῆς）」ἔθνος なのである（43 節）。その実とは、やはりヨハネが告知する「悔い改めにふさわしい実（καρπὸς ἀξίος τῆς μετανοίας）」（マタイ 3：8）のこと、すなわち義の実践である。

また、ἔθνος の指示内容は「宙ぶらり」⁽²⁹⁾ あるいは「不可解」⁽³⁰⁾ なのではない。これは「その実を結ぶ」という分詞構文によって限定される一般的用法であることは須藤⁽³¹⁾ が明らかにしているとおりである。また、Olmstead の最初の指摘のように「新しい ἔθνος の存在は、古いものが退けられるということの意味する」ことに重点があるのであり、実を結ぶ ἔθνος の提示は、「実を結ばないあなたたち」への警告なのである⁽³²⁾。

そのように神の国が取り上げられてしまう「あなたたち」とは、物語の枠組みの中において直接的には「祭司長たちやファリサイ派たち」（45 節）のことを指している。しかし彼らはそのような脱落者の典型ではあるが、脱落者は彼らだけに限られるのではない⁽³³⁾。そのことは、次のペリコーペにおいて明瞭化される。

3) マタイ 22：1～14

ルカの並行箇所との相違は以下の通り。

- ・マタイはこれ以前の二つの喩えとこの喩えを組み合わせ（1節）、三重の喩えに形成している。
- ・客を招くのが「ある人」ではなく「王」。
- ・単なる宴会ではなく、王子のための婚宴。
- ・婚宴の用意ができたことを知らせる呼びかけ（4節 b）がやや詳しい叙述になっており、さらにはこれに先立って招待が行われていたことへの言及が加えられ

(29) 「このことが妥当する『民族』が誰であるのか、マタイは『宙ぶらり』のままにしている。（中略）この開放性はマタイの『実の教会論』に合致する」（ルツ、前掲書、274 頁）。

(30) Olmstead, p. 131.

(31) 須藤、前掲書、4 頁以下。

(32) 申命記 32：21 参照。

αὐτοὶ παρεζήλωσάν με ἐπ' οὐ θεῶν παρώργισάν με ἐν τοῖς εἰδώλοις αὐτῶν καὶ γὰρ παραζήλωσω αὐτοὺς ἐπ' οὐκ ἔθνη ἐπ' ἔθνη ἀσυνέτῳ παροργισῶ αὐτούς

הם קנאוּ בלא־אל כעסוּני בהבליהם ואני אקניאם בלא־עם בגוי נבל אכזעם

「彼らは神でないもので私にねたみを起こさせ、私を怒らせた、彼らの虚像（偶像）で。そこで私は民でないもので彼らにねたみを起こさせ、愚かな異邦人で彼らを怒らせる。」

(33) そもそも論争相手は、当初の「祭司長たちや民の長老たち」（マタイ 21：23）から二転（21：45「祭司長たちやファリサイ派たち」）・三転（次ペリコーペの 22：15～16「ファリサイ派たち・その弟子たち・ヘロデ派たち」）していく。

- (3節)、複数回の丁寧な呼びかけがなされたことが印象付けられる。
- ・招待を断る理由が異なり、断りのせりふも省略されている (5節)。
 - ・王の僕たちが迫害・殺害されている (6節)。
 - ・王による報復として町が焼き払われ、「人殺し」と断定された招待客たちは滅ぼされる (7節)。
 - ・大通り (ルカ版では広場や路地) から集められるのが「貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人」から、「善人も悪人も」(9~10節)。
 - ・物語の結末は、ルカ版ではまだ空いている席のためにさらなる招きを王が指示する (ただし最初に招かれた者たちは除外される) が、マタイ版では婚礼の礼服を着ていない客が外に放り出され「泣きわめきと歯ぎしり」という末路を迎えることへと変更され、さらには「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」との結論が述べられる (11~14節)。

この喩えでもやはり排除と包摂のモチーフが見られるが、前二つのペリコーベと異なるのは、それが二つの段階をたどることである。最初の招待客は「ふさわしくない」(8節)として退けられ、新しい客が招かれる。しかし、招かれてやってきた者たちの間にさえ、ふさわしくない者がいて、外の暗闇に放り出されるのである。

この喩えでは最初に招かれた者は、前段の喩えにおける邪悪な農夫たちに通じる、その非礼かつ非道なふるまいから「ふさわしくなかった」(8節)と退けられ、滅ぼされる (7節)。

婚宴への招きは、前段の喩えにおける僕の派遣と同様、預言者の派遣を意味している。それゆえ、ここでも僕たちへの迫害 (6節) は、預言者に対する迫害を意味している。この非道に対する処分は町を焼き払うというものであったが、おそらく 70 年のエルサレム破壊が含意されているのであろう⁽³⁴⁾。

彼らは僕の殺害への報復として滅ぼされるのではない。なぜなら招待を無視し、自らの用事へと出かけただけの者たちも共に滅ぼされるからである。招待を断るというふるまいが「ふさわしくない」ために彼らは退けられるのであり、「ふさわしくない」ふるまいの極致が僕の殺害なのである。

退けられ、滅ぼされた人々にかわって「町の大通り」(*ἐπὶ τὰς διεξόδους τῶν ὁδῶν*) から招き集められたのは、「悪人も善人も皆」であった。これはマタイ 13:24~30 のいわゆる「毒麦の喩え」と同様、当時の「キリスト教世界」の状況と、マタイの問題意識を伝えていると考えられる⁽³⁵⁾。最初に招かれた者がふさわしくなかっただけで

(34) ルツ、前掲書、291 頁。

(35) 日本新約学会第 51 回学術大会での研究発表に基づく拙稿 (澤村雅史「マタイ福音書における ἀνομία—その対象をめぐる議論について—」、『新約学研究』40 号 (日本新約学会)、2012 年、7~21

はなく、今招かれてともにいる者の中にも不適格者が存在しうるのである。

この警告は、礼服を着ていない客の存在と、彼に下される処分によってさらに明確化・先鋭化される（11～13 節）。客が集められた経緯からして、礼服を着ていないことがとがめられるのは不自然であり、礼服には寓喩的含意があることが推察される。礼服によってあらわされるものは、直前のペリコーペが示すものを重ね合わせれば、「ふさわしい実を結ぶ」わざのことでありと推察される⁽³⁶⁾。当該ペリコーペ前段の、最初に招かれた客たちは、前述のように、王の招待を無視するという非礼、さらには王の僕を殺害するという非道、というふるまいが「ふさわしくなかった」（8 節）ために退けられる。同様に、招待に応えながらも放逐された客は、礼服を着ないというふるまいが「ふさわしくなかった」ために退けられるのである。

この礼服を着ない客への処分は、終末における裁きを意味している⁽³⁷⁾。

4. まとめ

「二人の息子の喩え」（マタイ 21：28～32）、「ぶどう園の喩え」（マタイ 21：33～44）、「婚宴の喩え」（マタイ 22：1～14）は共通して、神の国の再編、すなわち排除と包摂について述べるが、その再編は、「ふさわしい実を結ぶ」＝「義（の道）を實踐する」＝「招きにふさわしいふるまいをする」ことにかかっている。すなわちここでは重ねて、イエスが命じた律法遵守（マタイ 5：17～20、28：20）が求められているのである。このメッセージは、「善人も悪人も皆」集まっている（マタイ当時の）キリスト教世界全体かつ個々の信仰者に向けられたものである。招かれた者の一部はすでにその招きに背を向けてしまい、また、招きに応じて集まった者の中にも不適格者が存在する。それは「ふさわしい実を結ぶ」＝「義（の道）を實踐する」＝「招き

頁）では、マタイにおける特徴的な語である ἀνομία が終末論的な裁きに関連して使用されている用語であることに注目し、マタイ当時の諸民族宣教が行われている状況下で律法遵守におけるゆるみや瑕疵が生じている状況に対する辛辣な警告が込められていることの論証を試みた。

加えて日本新約学会第 52 回学術大会での研究発表に基づく拙稿（澤村雅史「マタイによる福音書 28 章 20 節『全て』の指示内容について」、『広島女学院大学生生活科学部紀要』第 20 号、2013 年、41～52 頁）では、28：16～20 のいわゆる「大宣教命令」が、全世界・諸民族への伝道を積極的に推進する意図よりも、それを批判的に推進するマタイによって、律法の掬個々の完全な遵守を命じていることを、「全て (πᾶς)」のマタイにおける用語法をたどることを通して論証することを試みた。

これらにより、諸民族伝道がすでに生じている状況をマタイは追認せざるを得ないが、その状況に対し、マタイは福音書執筆によって、律法重視の諸民族伝道への方向修正を試みているという仮説を提示した。

(36) ルツ、前掲書、294 頁。須藤、前掲書、29 頁。

(37) マタイ福音書では「ここでは泣きわめきと歯ぎしりがある」（ἐκεῖ ἔσται ὁ κλαυθμὸς καὶ ὁ βρυγμὸς τῶν ὀδόντων）という表現は終末的裁きを受けた者たちの末路あるいは反応として、8：12、13：42、13：50、22：13、24：51、25：30 に用例がある（ルカでは 1 回のみ 13：28 に前述の「不義」を行う者どもの末路として言及がある）。

にふさわしいふるまいをする」ことのない者たちである。ἐκκλησίαのκλητοί（招かれた／呼ばれた者たち）が全て ἐκλεκτοί（選ばれた者たち）ではないのである。

21：43 においては「あなたがた」と「ふさわしい実を結ぶ ἔθνος」が対置されている。「あなたがた」とは、単にイスラエルの指導者たちのことや、ユダヤ人全体のことではない。礼服を着損ねて外に出される者、すなわち律法遵守におけるゆるみ（＝不法 ἀνομία）に傾く者たちすべてなのである。

そして、この再編はすでに起こったこと（たとえばイスラエルから異邦人への宣教方向の転換といったような）ではなく、マタイにとっての現在において進行中のことからであり、終末において完成される出来事（cf. マタイ 13：24～「毒麦の喩え」）なのである。

マタイ 21：43 における ἔθνος は、その語自体の意味内容として具体的な民族や集団を表してはいない。しかし、この表現を含むペリコーペ全体（あるいはそれを含む一連の喩え集）が指し示しているのは、「キリスト教世界」全体に喫緊の課題としてつきつけられ、終末において完成される、義の実践というふさわしい実を結ぶ「新しい民」への再編なのである。

（本稿は、2013 年 9 月に立教大学で行われた、日本新約学会第 53 回学術大会での発表に、加筆修正したものである。）